

# 自立活動部だより

天王みどり学園自立活動部  
発行日 2017.10.23 No.2

PT、OT、STの外部専門家を活用した事例報告会についてお知らせします。「自立活動の在り方について事例をもとに協議、検討し、より充実した取組を目指す」ことを目的に、年3回開催しています。児童生徒の事例を報告し、PT、OT、STからの指導助言により、指導の評価・改善ができるとともに職員全員で指導について共通理解をもつ機会になっています。

外部専門家を活用する際には、①「個別の支援計画」や「個別の指導計画」「年間指導計画」に沿った外部専門家支援個別課題を明確にする。②指導支援を受ける前の課題と受けた後の結果を記録し、評価する。③事例報告会等を通して外部専門家より指導された内容・方法の共有化を図る。④校外医療機関等での訓練見学を通して児童生徒に関する情報を収集する。⑤保護者へ外部専門家との連携について伝達するなど、児童生徒の教育課題を明確にし、外部専門家からの指導を教育活動に変換し、指導を行っています。

## 外部専門家を活用した事例報告会

今回は、多動性や自己刺激行動のある児童への働き掛け～「感覚あそび」を通して～というテーマで小1学級担任が事例を報告し、作業療法士の高橋先生より、指導助言をいただき、併せて「感覚刺激と子どもたちの行動との関係や支援について」というテーマで講義をしていただきました。

### 事例報告：多動性や自己刺激行動のある児童への働き掛け～「感覚あそび」を通して～

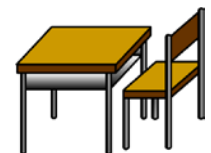
#### 【実 態】

- ・小学部1年男子
- ・高所、トランポリン、ブランコなど揺れや回転のある全身を使った遊びを好む。
- ・カード（公文式の絵カードなど）や、かるたを並べて楽しむ。
- ・絵本を読む（ページを素早くめくる、絵本をハンドルのように左右に振る）。
- ・単語で身近な言葉をいくつか話す。質問は、答えなかったりオウム返しをしたりすることが多い。最近は的確に答える（「トイレいく？」「だいじょうぶ！」、絵本を見て「おもしろかった」）場面も見られるようになってきた。



#### 【自立活動の目標と指導内容・指導場面・指導方法】

指導目標	・学習活動に関心をもち、その場から離れることなく誘いに応じて教師と一緒に取り組む。【2心理的な安定（1）（2）】【3人間関係の形成（4）】	
指導内容	・関心をもてる活動の設定 ・見通しをもたせる工夫	・情報の整理、刺激の少ない環境作り ・言葉やカードでやり取りする場面の設定
指導方法	・身振りや絵カード等の活用	・静と動の活動設定 ・感覚あそび



#### 【感覚あそびの取組】

高橋OTから	指導・評価
・感覚刺激の閾値が高いため、強い刺激を求めて衝動的で危険な行動をとりやすいのではないかと。 ・感覚刺激の欲求を満たすために、安全で強い感覚刺激を代わりに入力する工夫をする。	・座っているとき両肩を上から押すと、動きが落ち着く様子が見られるようになった。 ・見通しがある活動には5～10分程度座って取り組めるようになってきた。集団での活動、校外学習など刺激が多いときはやはり多動性、衝動性が見られる。

- ・運動覚、触圧覚、前庭覚を総合的に入力する遊びをする。



### ①ピーナツボールの押し合い

児童と向かい合い、ボールを押し合う遊び。  
→関心が低いのか、押す感覚が上手くつかめなかったのか、活動に興味を示さなかった。

### ②マットの中で圧迫と回転の刺激

重さと厚みのあるマットに児童が寝て、ぐるぐる巻きになって回転する遊び。  
→笑い声、楽しそうな表情が見られた。「早く」と話し、更に強い刺激を求めた。

### ③大きな滑り台を押す

大きな滑り台を移動する遊び。  
→滑りたい気持ちから、積極的に「押す」動作が見られた。



### 今後の取り組みに向けて

- ・「落ち着いたなさ」を、感覚の面からアプローチすることで、違う視点から児童をとらえるきっかけとなった。他の児童も、こうした視点から考えてみたい。
- ・毎日の学習のなかで、いつ・どんな時間に設定すれば良いのか検討していく。また、普段の学習でこうした動きを取り入れた活動を設定できないか、検討していく。
- ・関心が持続し、積極的に取り組めるような遊びを検討する。

## 「感覚刺激と子どもたちの行動との関係や支援について」

秋田大学医学部保健学科作業療法学専攻 講師 高橋 恵一先生

揺れや回転のある遊びを好む子どもは、前庭刺激に対する閾値が高く、普段の生活活動の中で入力される刺激では満足しないため（脳に響かない、反応しない、覚醒レベルを維持できない…）、トランポリン、ブランコなどの遊びで脳に届くようなより強い刺激を求めていると解釈できる。また、多動の場合は、動き回ることによって絶えず運動覚を入れている。偏食がある場合は、味の濃い・薄い、熱い・冷たい、固い・やわらかい、など味覚以外の感覚刺激に対する入力のされ方に偏りがあることに原因がある可能性がある。感覚刺激に対する閾値が高いとは、閾値が高すぎると反応が鈍い、強い大量の刺激でないと反応しない。よって、理解する、わかる、満足する、安心するためには、人よりも強い、大きな、大量の刺激をいれなければならないことになる。このことが、多動、自己刺激行動、激しい遊びを好む背景となっている。

本事例の児童の特徴の一つが、ページを素早くめくる、絵本をハンドルのように左右に振る行動がみられるが、これは通常入ってくる視覚刺激をより強い刺激にするためにそうしているのではないかと考えられる。また、ブランコを激しく揺らしたり、跳ねたりしているのは興奮しているからではなく、興奮や不安を沈静化させるため、あるいは逆に覚醒を維持するためにそうしているのかもしれないと考えられる。

感覚過敏の子どもたちにとって大勢の人がいる空間は視覚的、聴覚的にも莫大な量の感覚刺激が調整されることなく脳に入ってしまう。子どもの落ち着く場所を確保するなど、環境を整え、適切な感覚を入力することが大切になる。

固有受容覚（普段の運動時・姿勢保持時に伴って自然に入力されている感覚で、運動と姿勢を調整するために働く）や前庭感覚（空間の中で自分の体がどこに、どうなっているのか、どちらの方向に向かって動いているのかを感じ取る）について、個々の行動特性や医学的情報をもとに、子どもの行動が意味するそれぞれの感覚に対する偏りを理解し、それに沿った対応をする必要がある。

そのためには、「この子はどの感覚を求めているか」Sensory Needsを満たすことを配慮した環境設定や課題の内容、提示の仕方、接し方を考えることが大切である。

### 【適切な感覚を入力する遊びの例】

#### 固有受容系を入力する遊び

##### ・綱引き



##### ・物を押したり、持ち上げたりして遊ぼう

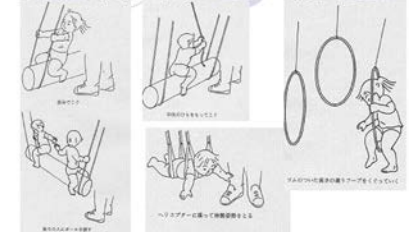


##### ・かくらべ



子どもは大きなものを押す、その心算やテストは、身体のアライメントを整えながら徐々にハードニングを行う。

#### 感覚統合訓練で行われる遊び（前庭感覚）



#### 感覚統合訓練で行われる遊び（前庭感覚）

